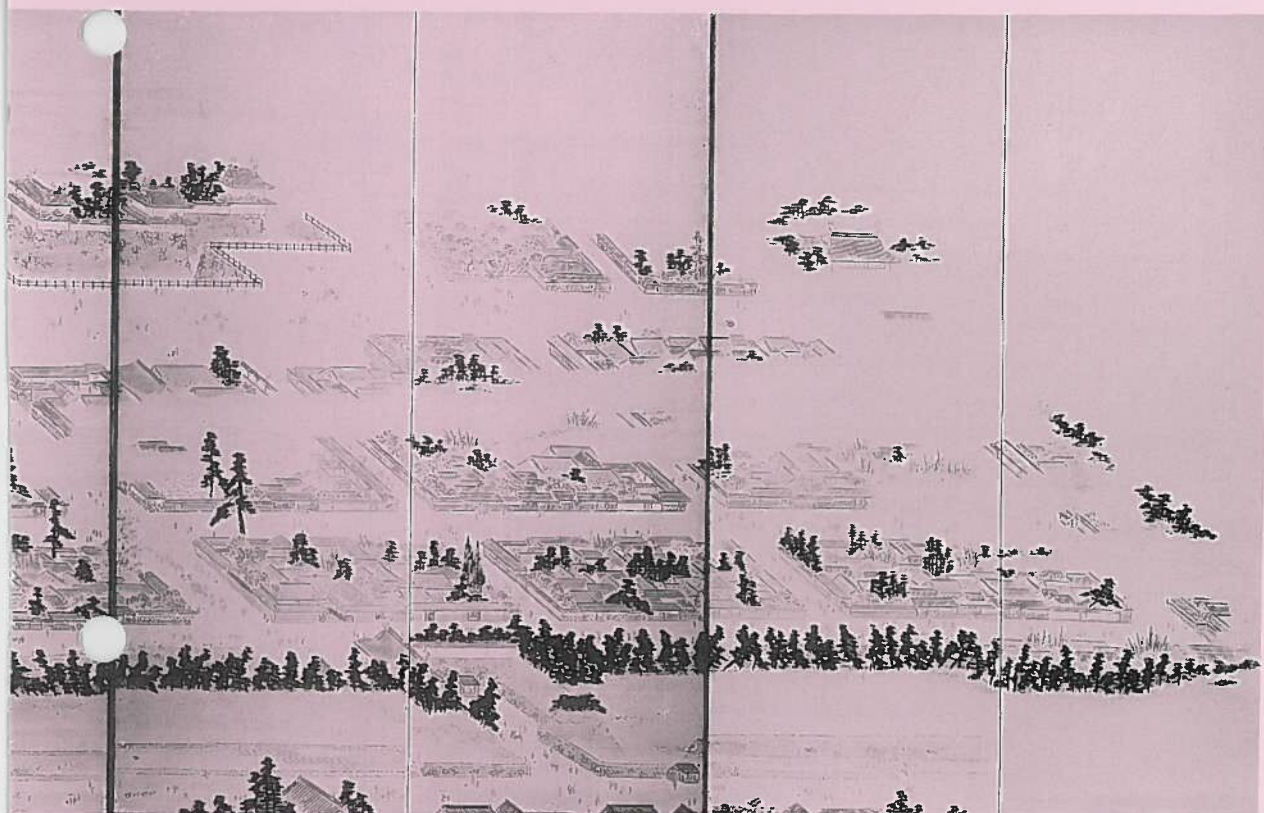


名古屋城三の丸遺跡

— 1・2・3次調査の概要 —



1989

名古屋市教育委員会

例 言

1. 本書は、名古屋市中区三の丸地内に位置する、三の丸遺跡の第1次、第2次、第3次発掘調査概要報告書である。
2. 各々の発掘調査期間、面積等は、本文中（II. 調査の経過）に記した。
3. 調査は、名古屋市教育委員会が実施し、文化課文化財係学芸員山田鉦一（第2次調査）、名古屋市見晴台考古資料館学芸員平出紀男、竹内字哲、千田嘉博（第1次調査）、伊藤厚史、水野裕之（第1次・3次調査）が担当した。
4. 発掘調査の実施にあたっては、名古屋市秘書室国際課、同建築局営繕課、同農政緑地局緑地施設課、名古屋国税局（第1次・3次調査）、市教育委員会建設課、丸の内中学校（第2次調査）の協力を得た。
5. 第1次調査では、南山大学文学部人類学科学学生に調査補助員として緊急に調査に出ていただいたほか、市博物館学芸課井上光夫、水谷栄太郎両氏にも調査に参加していただいたことを御礼申し上げます。
6. 第2次調査においても緊急に対処するため調査員として、愛知県師勝町文化財調査員である浅野清春氏のご協力を得た。
7. 発掘調査、整理作業にあたっては、以下の方々のご協力、ご指導をいただいた。あわせてここに記して謝意を表すものである。（順不同、敬称略）
赤羽一郎、遠藤才文、楢崎彰一、リチャード・メロット、ルパート・フォークナー、江崎武、吉岡康暢、矢部良明、柴垣勇夫、仲野泰裕、安達厚三、野場喜子、下村信博、鳥居和之、奥出賢治、伊藤秋男、戸田未起、桜井裕子
（南山大学学生）森崇史、古田麻美、澤村雄一郎、中原泰男、中村雅人、竹石ソニア、今村ゆかり、近藤千津子、梅田純代（中京大学学生）市川隆之、大野仁司、脇田朋美
8. 土坑(SK32)出土の漆椀の分析を(勅)元興寺文化財研究所北野信彦氏にいただいた。また、土坑(SK31)埋土の昆虫遺体の分析を(勅)愛知県埋蔵文化財センター森勇一氏にお願いしたほか、SK32出土の木札の墨書についても同センターの協力で赤外線写真を撮影した。
9. 本調査で出土した遺物、実測図等は、名古屋市見晴台考古資料館が保管している。
10. 本書の編集、執筆は、千田、山田、水野が行い、分担は目次に示した。

目 次

I. 名古屋城の位置と環境（千田） … 1	第2次調査 ……（山田） … 22
II. 調査の経過 ……（水野） … 2	第3次調査 ……（水野） … 26
III. 検出した遺構の概要 …（千田） … 5	V. 成果と課題 ……（千田） … 30
IV. 主な遺構と遺物	
1次・3区 SE03 ……（水野） … 8	（表紙写真は「名古屋城郭図屏風」・名古屋 城管理事務所蔵）
1次・4区 SK03 ……（千田） … 14	
1次・11区 SK32 ……（千田） … 18	

I 名古屋城の位置と環境

尾張国では天正 12 (1584) 年頃までに織田信雄の重臣の居城が小城下町を持ってほぼ均質に分布する都市網 (支城網) が形成された。そしてさらに天正 14 (1586) 年には知行替などによって清須城下町に武士・商職人の集住が行われ、各支城の廃棄が進んだ。しかし清須は低地で水攻めに弱く、また総構えを越える外町の形成など、慶長 14 (1609) 年頃には都市の再整理が望まれるに至った。このため当時大坂豊臣氏と対立を強めつつあった徳川氏は同年、領国尾張を固めるために名古屋台地北端への新城建設を決定した。

工事は普請を西国大名の天下普請で、作事を徳川氏の手で行った。そのプランは織豊系
の流れをくみ、近世城郭の到達点を示した。以後幕末まで尾張徳川家 62 万石の要をなした。天守・本丸御殿は 1945 年焼失したが、中心部と三の丸の堀・土塁は特別史跡に、二の丸庭園は名勝に、旧本丸御殿障壁画・天井板絵は重要文化財に指定されている。

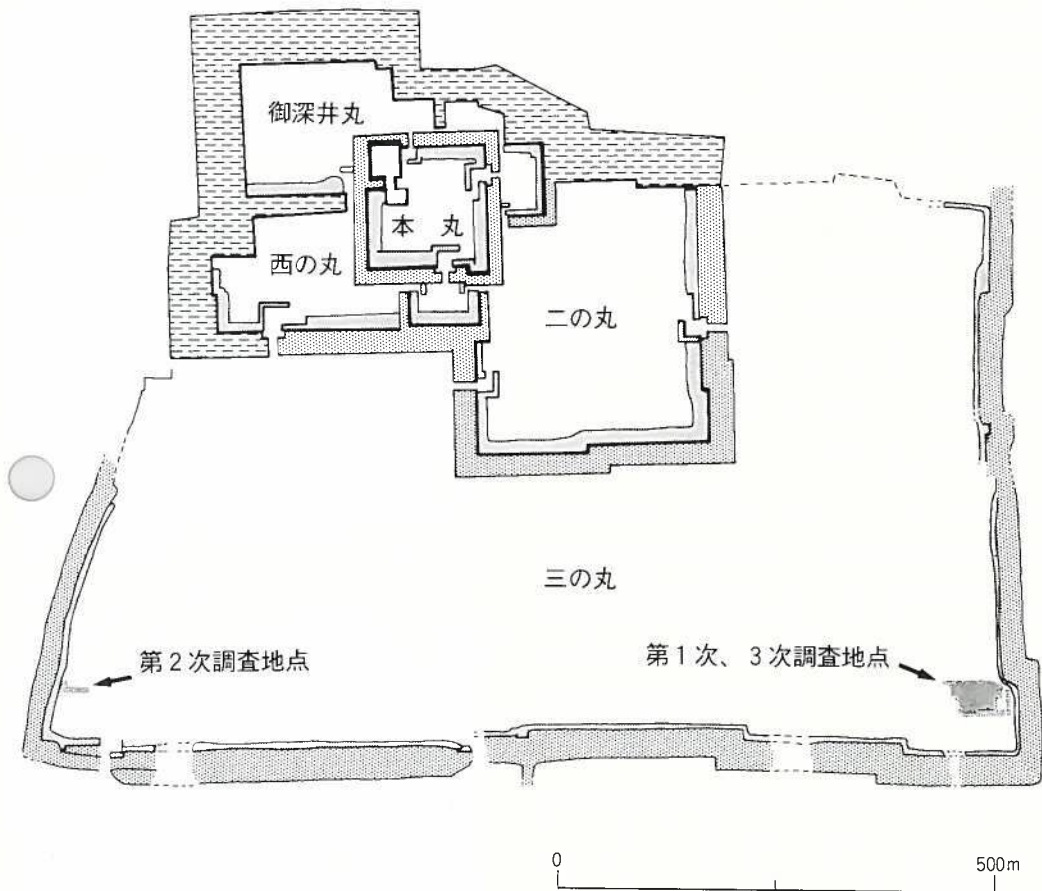


図1 調査位置図

II 調査の経過

名古屋城三の丸地内では、県教育委員会が昭和62年8月に、県立図書館等の建設予定地を試掘したところ、弥生時代の住居跡を検出した。そして、市教育委員会の試掘地点においても、城内ということもあって近世を主体とする時期の遺構、遺物が残存するところがあった。

市教育委員会は、昭和62年9月11日からの三の丸遺跡発掘調査を第1次として3度（3次）の調査を実施した。

このため、昭和63年4月25日付で名古屋市遺跡分布図の改定を行い、中区三の丸一丁目～四丁目地内（名古屋城外掘の内側地域）を三の丸遺跡（市遺跡番号7-27）とした。

第1次調査は、名古屋市公館の建設予定地（中区三の丸三丁目）のうち約2900m²を対象に、昭和62年9月11日から昭和63年1月30日までの間行われた。調査は、排土置場の関係から南半部分を先に終わらせ、埋め戻した後に北半部を調査した。発掘調査期間中には、市長も現場を訪れている。

第2次調査は、三の丸の西端、市立丸の内中学校地内（中区三の丸一丁目）の新築工事に先だって昭和62年11月24日から昭和63年1月9日までの間、約290m²を対象に実施した。

第3次調査は、三の丸の東南隅付近の1次調査区に接した公館関連工事に関わる約400m²の部分を対象に行われた。期間は、昭和63年4月6日から同年5月30日までであったが、途中、建設工事の関係から31日間は、発掘調査を中断している。



△調査前状況〔1次〕



△調査風景〔1次〕



△市長（左から2人め）の見学〔1次〕



△市長（左から3人め）の見学〔1次〕

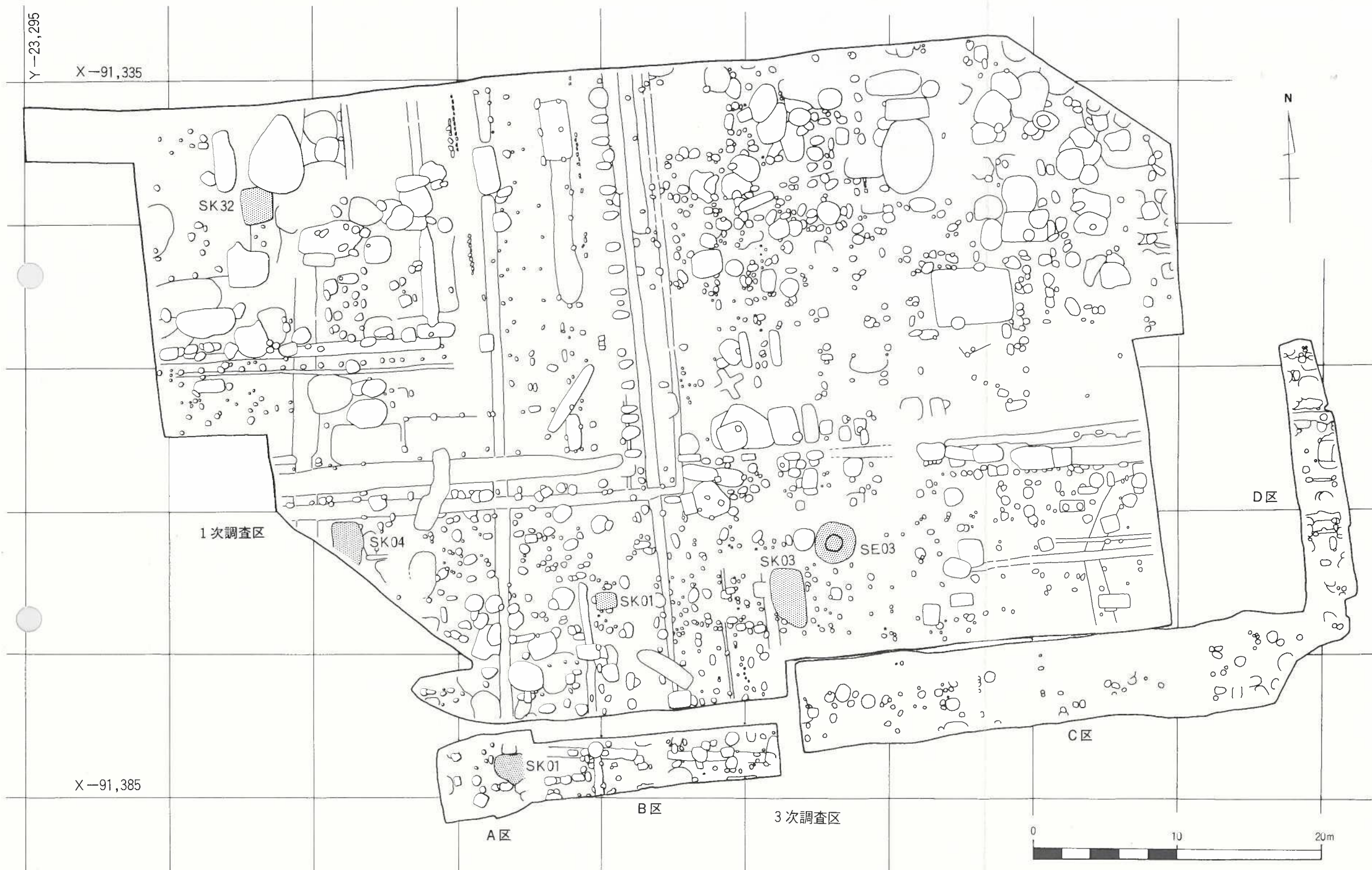


图2 第1次・3次調査主要遺構配置図 (1:300)

III 検出した遺構の概要

三の丸は重臣の屋敷地であった。調査区内では比較的良好な状態で遺構を検出した。これらの遺構はほぼ全て近世名古屋城に関わるものであり、屋敷地3軒とその間を抜ける街路と評価された(1・3次)。以下全体の概要を略述する。

1 街路(1次)

調査区北西部分で逆L字形に伸びる街路を検出した。南北街路SS01と東西街路SS02である。SS01の幅は西側屋敷地(A)境の石列と東側屋敷地(B)の石組側溝との間と考えられ、約8mである。SS02の幅は北側屋敷地(A)の塀SA01と南側屋敷地(C)北の溝SD06との間と考えられ、約8mである。路面はいずれも固く締まり版築状に土が重ねられていた。これを除くと溝、小pitが現れた。これらの時期は全て17世紀中頃までにおさまると考えられ、三の丸の屋敷割が最終的に定まる年代を示すと考えられる。

2 区画溝(1・3次)

三の丸の屋敷割が定まる以前に調査区内には大規模な区画溝が掘削されていた。このうちSD01・02は真北方向に伸び、SD03・04・05は真北から西へ約6°偏する方位またはこれに直交する方位を示す(三の丸の屋敷地はこの方位に乗る)。各溝の遺物は少ないがそれと遺構の切り合い関係より17C中頃のものと考えられる。SD02は3次調査区で南東に曲がり、虎口をつくる。屋敷割以前の土地区画に伴う溝であろう。SD03・04・05は三の丸内の屋敷割設定に伴う溝と考えられ、屋敷の区画決定直後に埋め戻されたと思われる。後述する屋敷地境との関係から当初SD04・05に沿って屋敷地が企画され、のち南北方向約1m、東西方向約2.5m街路を狭くして屋敷地を拡張したことがわかる。

3 屋敷地境(1・3次)

屋敷地境は居館と違い個々の防御の溝(堀)は巡らさない。調査で検出した境の施設としては石列、塀のみである。屋敷地(A)の東面では1段の切石による低い石列で境が形成されていた。この石列は少なくとも一度造り替えられ、屋敷地を東に拡張している。また(A)南面では掘立柱の柱穴列を検出した。心々間の距離約1.4m、直径約50cm、深さ約70cm、柱痕直径約25cmである。塀SA01が復元できる。SA01の上層にはそれを埋める東面同様の石列痕跡が確認できるので、この屋敷地(A)では、①SD04・05→②SA01→③石列(前期)→④石列(後期)という変遷がたどれる。

屋敷地(B)西面では楕円形の土坑列を検出した。心々間の距離約1.8m、土坑の東西長約1m、深さ約1m、柱痕の直径約15cmである。土坑が楕円をなすのは本柱と控柱の穴を合わせて掘削したため、塀SA02が復元される。屋敷地(B)、(C)北面では心々距離約1.8mの

柱穴列を検出した。塀 SA03 が復元される。

一方同一屋敷列に配された屋敷地(B)と(C)の境は SD07 と SA04 で区分されていた。SA04 の心々距離は約 1.6 m である。SD07 は SD06 の南 8 m の地点で途切れ、SD07 東に平行する SA05 も同様の位置で止まることから一連の機能を持ったと推測できる。街路に近い部分の溝が途切れているのは長屋などの建物があったからではないかと考えられる。

4 門（1次）

1～3 次の調査で門と判定されたのは屋敷地(A)南面の 1 つだけである。(SI01)。本柱間の心々距離約 2.7 m、柱穴直径 60～70 cm、深さ 90～110 cm、柱痕直径約 25 cm である。本柱穴の後方約 1.8 m に控柱の柱穴がある(西側は幕末の廃棄土坑で消滅)。この門は①段階の屋敷境である SD04 に接してつくられることから、この時期の門だと考えられる。②段階の SA01 の時期には塀が連続し、門はなくなっている。規模から考えて裏門のようなものと思われる。

5 廃棄土坑（1次・2次・3次）

2 次調査では三の丸土塁に接する所まで廃棄土坑がつくられており、屋敷地の奥にこうした土坑が掘られたと理解できる。これは城下町の中・小武家屋敷とも共通する⁽¹⁾。1・3 次調査区では各屋敷地が広大なため、単純に屋敷地奥という配置のみではない。しかし屋敷地(B)では調査区北側 10 m までに土坑が集中し、屋敷地(C)では境溝 SD 07 に接して土坑が集中することから、逆に(B)でのあり方から北側の屋敷地境に近いことが推測できる。

屋敷地(A)ではあたかも四角く土地を掘り残したように廃棄土坑がつくられており、この方形に掘り残された部分は、土坑の年代から 18 世紀以降安定して建物が存在した所だと判断される。つまり屋敷地(A)では建物部分を除き、検出した全ての空間に廃棄土坑がくり返し造られていたのが確認される。

6 文献・絵図との対照（1次・3次）

18 世紀初め頃の調査区内の様子を「士林浜廻」、「尾府名古屋図」(共に蓬左文庫蔵)によって見ると、屋敷地(A)は生駒宗勝 (3000 石)、(B)は津田英信 (3000 石)、(C)は津金胤忠 (150 石) の屋敷に当たる。このうち屋敷地(C)は享保 18 (1733) 年写の「享保名古屋図」の時期には屋敷地(B)の拡張によって取り込まれ、一つづきの津田氏屋敷となって消滅している。また天保 14 (1843) 年に成立した『尾張志』によれば、街路 SS01 は「東御土居通」⁽²⁾、SS02 は「南御土居筋」と呼ばれ、三の丸の長方形街区を形成する幹線路の一端であることが判明する。

また SS02 南を東東に沿う SD06 は宝暦 3 (1753) 年写の『坪間路検帳』(名古屋市博物館蔵)の記述から、SS02 南側を東西に貫いて西流する三の丸内の主要排水路の一端である

ことがわかる。

- (1)『城と町のデザイン—戦国～江戸の考古学』(名古屋市見晴台考古資料館 1989年)
- (2)街路の名称は必ずしも一定していなかったようでこの他に「東御土居下通」、「東御土居筋」などの呼び方が知られる。

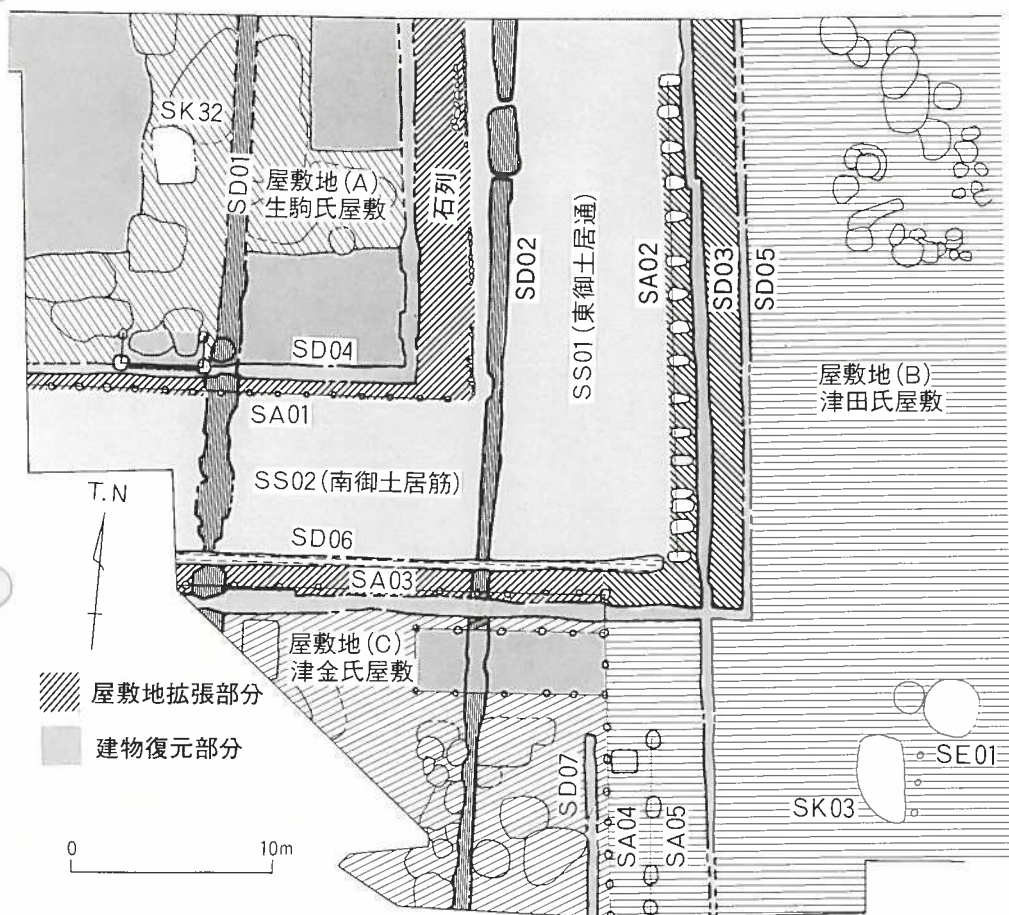


図3 1次調査北西部要図

IV 主な遺構と遺物

1次・3区 SE03

第1次調査で検出された井戸のうち最も規模の大きな遺構である。平面形はほぼ円形を呈し、検出面の径は、2.9 m 前後である。この範囲は、井戸を掘削するためにやや大きめに開口させた部分であり、検出面下約 2.3 m からは、井筒部分の口径のみの大きさとなっている。井筒部分は、上面まで続いていたと思われる状況が埋土断面から観察される。した

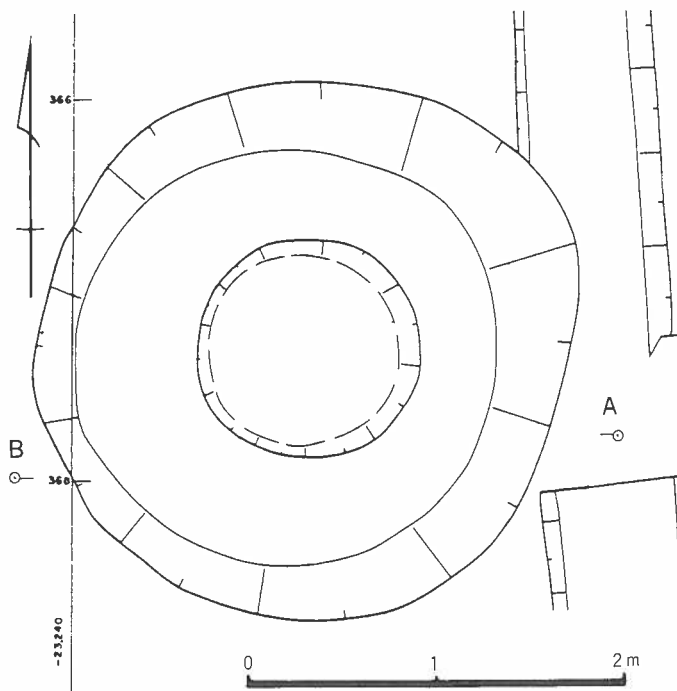


図4 SE03 平面図



△ SE03 位置 (矢印)

がって、この部分の周囲の埋土は、井筒の裏込め部分にあたる。なお、木製の井側の痕跡は確認することができなかったが、本来は存在していたものと思われる。埋土の遺物は、井筒内、裏込め部分とも17世紀代の遺物で占められているようであり、菊皿、織部皿など同種の製品が、どちらの埋土からも複数出土した。本遺構は、出土遺物などからみると、構築されて間もなく埋め戻されてしまっている状況である。また、第1次調査で検出された井戸のうち漏斗状に掘削されたものは、当遺構だけであり、他に検出された20数基の井戸は、井筒部分のみを円筒状に掘り下げた形のものであった。形態のちがいは、技術的なものか、時期的なものであろうか。

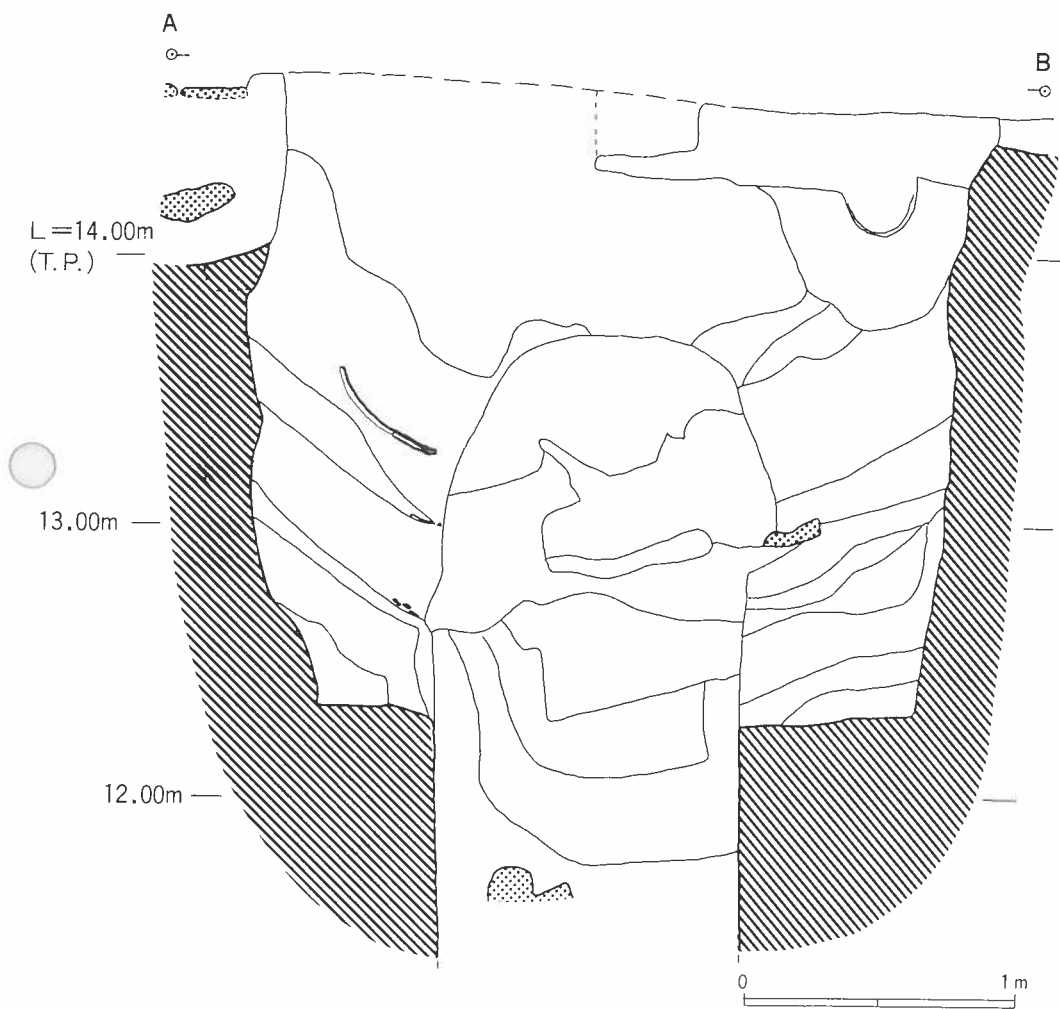


图5 SE03 断面图



△ SE03 埋土断面



△ SE03 完掘状况

表1 3区SE03出土陶磁器数

器種	製品	瀬戸・美濃陶器	肥前系磁器	常滑製品	中国製磁器	土師質土器	産地不明陶器	計 (%)	
								計	(%)
碗類	灰釉碗	6						6	4.4
	鉄釉碗	4						4	2.9
	染付碗		5					5	3.7
	青磁碗		1					1	0.7
皿類	志野織部皿	29						29	21.3
	織部皿(鉄絵皿)	6						6	4.4
	菊皿	6						6	4.4
	灰釉皿	1						1	0.7
	鉄釉大皿						2	2	1.5
	染付大皿		1					1	0.7
	染付皿		1					1	0.7
	青磁皿		1					1	0.7
	赤絵皿				1			1	0.7
	土師皿						45	45	33.1
	小杯	志野織部小杯	2						2
灰釉小杯		1						1	0.7
白磁小杯			1					1	0.7
向付鉢	御深井釉向付	1						1	0.7
	織部大鉢	2						2	1.5
鉢	黄瀬戸大鉢	1						1	0.7
	鉢?	2						2	1.5
	播鉢	7						7	5.1
壺	鉄釉壺?	1						1	0.7
	鉄釉甕?	2						2	1.5
甕	甕			2				2	1.5
	内耳鍋						3	3	2.2
火入	鉄釉火入	1						1	0.7
水注	緑釉流し灰釉手付水注	1						1	0.7
	計	73	10	2	1	48	2	136	
	(%)	53.7	7.4	1.5	0.7	35.3	1.5		(100%)

出土遺物についてみると、左表以外にも瓦片が多数出土したほか、かまどの構築材と思われる凝灰質砂岩の切石片(被熱)が出土している。

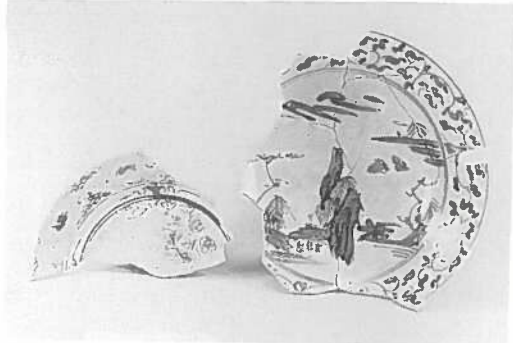
図示した遺物は、1が織部皿、見込みに鉄絵が施される。2は志野織部皿であり、土師皿に次いで点数が多い。3は、灰釉皿。4は、菊皿で口縁部は緑釉が施される。5は、志野織部小杯。6は、灰釉小杯。7は、白磁小杯。8は、染付碗。9は、土師皿であり、灯明皿として使用されたものが多く、スス状の付着がある。法量は、図示した大きさのものがほとんどである。10~12は、播鉢。13は、直径33cm

の染付大皿である。文様の筆触などは、肥前山辺田窯製品に類似する。14は、中国製の赤絵皿であるが、上絵付は部分的に消失している。

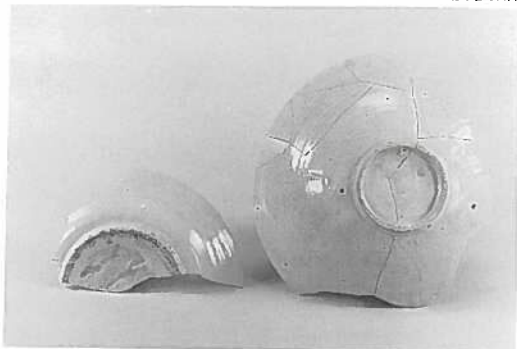
SE03出土陶磁器の肥前系磁器を1とした瀬戸・美濃陶器の割合は7.3である。これに比べ、東京(江戸)の都立一橋高校内遺跡出土の17世紀後半までの陶器は、磁器1に対して1.7~1.8程である。三の丸遺跡で瀬戸・美濃製品の依存度が高いのは、当地域での該期の特徴であろうか。また、18世紀代の製品を出土した土坑(4区、SK03)では、磁器1に対して2.7であり、当地にあってもしだいに肥前系磁器が普及してきている。



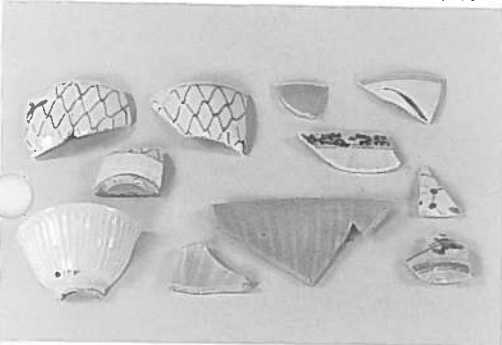
△瀬戸・美濃製品



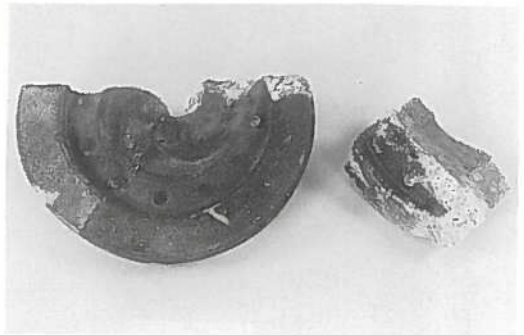
△赤絵・染付皿



△同左ウラ



△肥前系磁器



△軒丸瓦



△土師皿・内耳埴

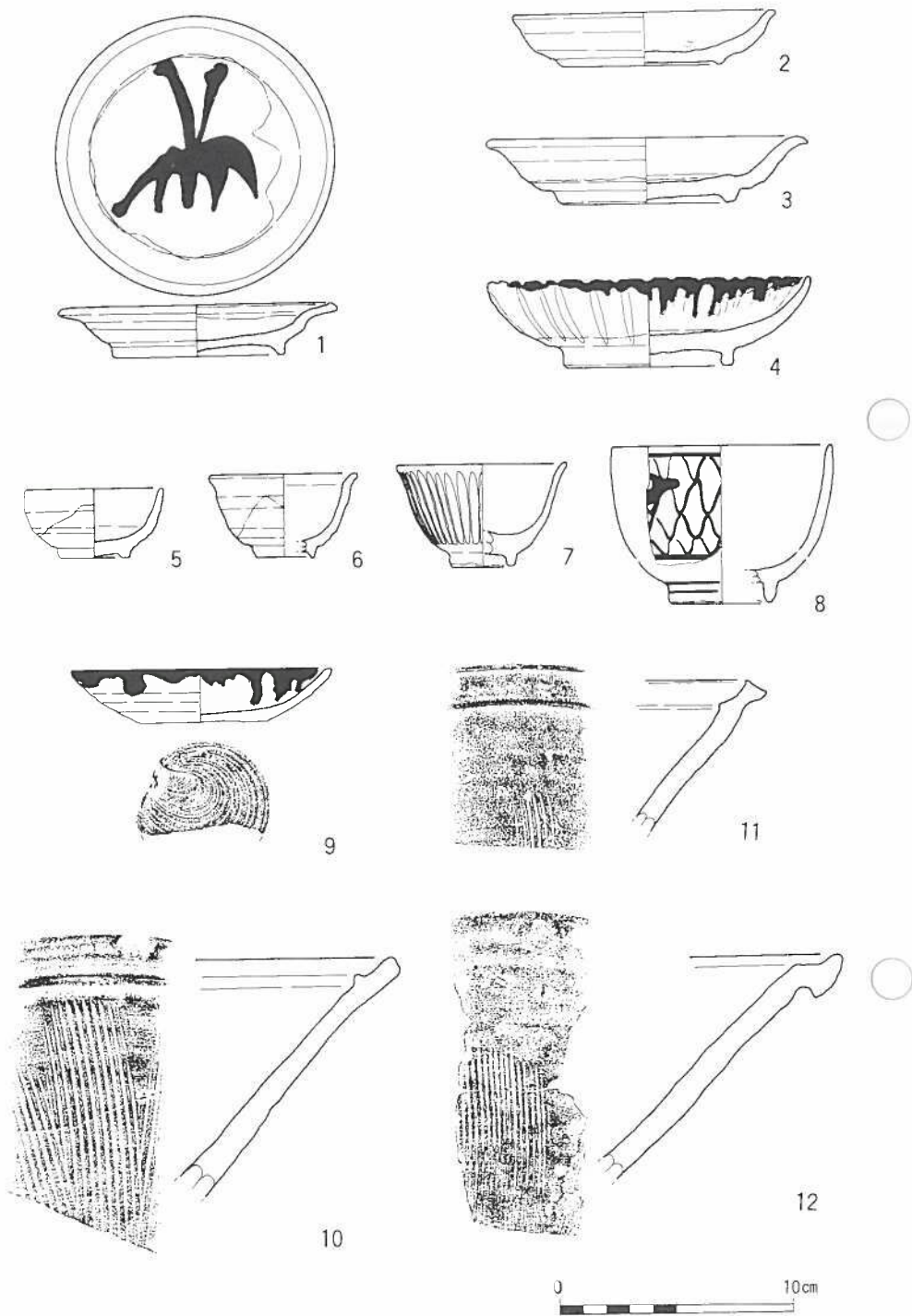
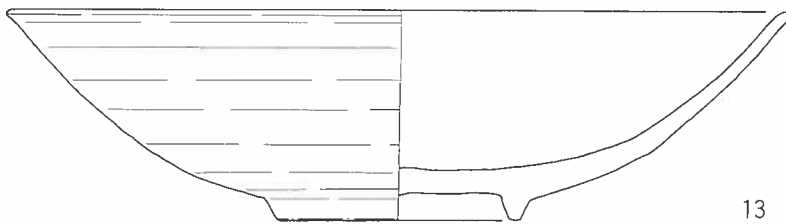
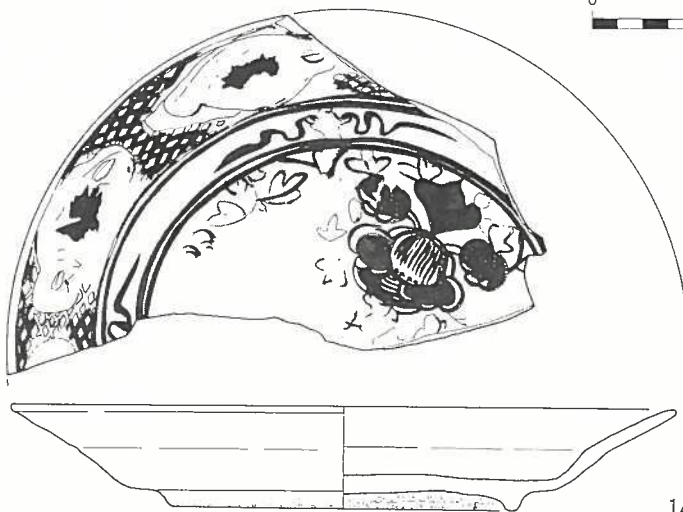


图6 3区·SE03出土遺物(1)



13



14

图7 3区 SE03 出土遗物(2)

1次・4区SK03

SK03は先行するSA07を否定して掘られた津田氏屋敷内の廃棄土坑である。東側は同時に存在していたSA06に規制されるため楕円形をなす。南北長約4.2m、東西2.2m、深さ約80cmの規模である。上層部は人為的にたたき締められていた。底面に近い最下層の灰青色砂質土20cmの中から一括して164点の陶磁器と多数の木製品痕跡が検出された。

陶磁器は27器種に及びバラエティーに富む(表2)。18世紀代前半のものが主流を占めている。陶磁器・木製品などの生活用品を投棄した後、すぐ埋め戻されたと理解される。

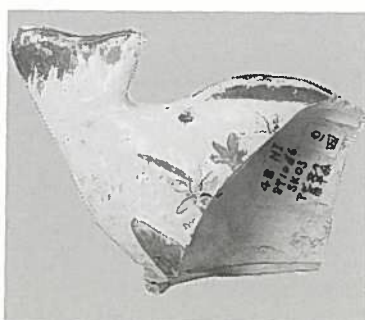
図示した遺物は1が青磁花瓶である。伊万里製と思われる。2は白磁輪花鉢である。押型成形され、口銹を施す。伊万里製。3は魚形色絵水滴である。頭部を欠損する。押型成形され、細かいうろこがつくり出される。片面背ヒレ後端部脇に小孔を1つ穿つ。背ヒレ・胸ヒレに朱を施し、体部に樹木を描く。葉(花)の一部と体部下端は黒でふちどり緑色を施す。伊万里製。4・5は白磁紅皿である。伊万里製。6は染付小碗である。7



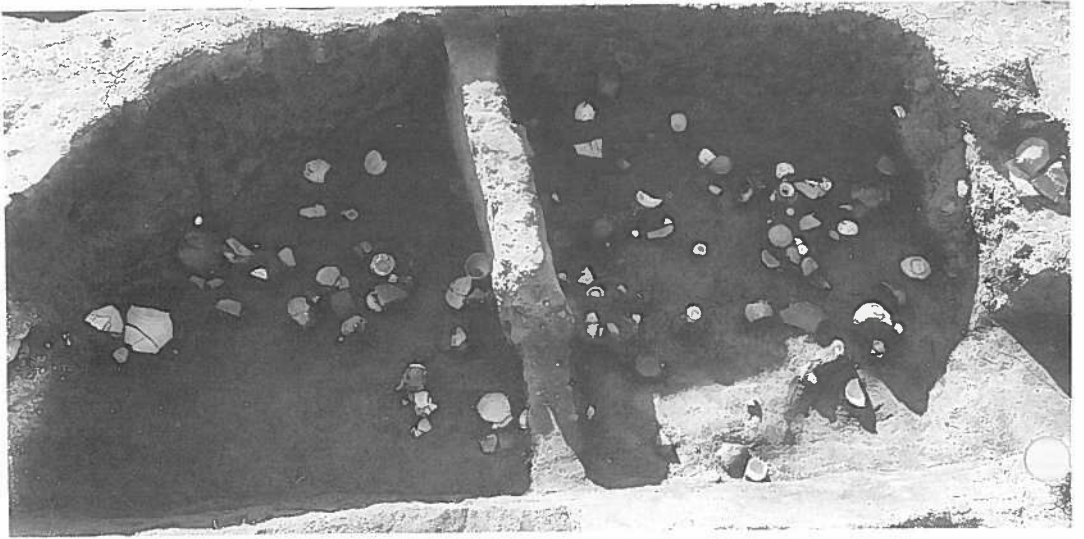
表2 4区SK03出土陶磁器数

器種	製品 瀬戸・ 美濃陶器	肥前系陶器	肥前系磁器	産地不明 陶器	常滑製品	土師質土器	計	(%)
碗	28	6	14	3			51	31.1
碗(蓋)	1						1	0.6
皿	5		1			36	42	25.6
灯明皿	1						1	0.6
灯明皿受皿	1						1	0.6
小杯	3		8			1	12	7.3
向付	3		2				5	3.0
合子(蓋)	6						6	3.6
蓋物	2						2	1.2
小鉢	1	1					2	1.2
鉢	7						7	4.3
插鉢	3						3	1.8
壺	3						3	1.8
土瓶	1						1	0.6
手付水注	2						2	1.2
蓋	5		1				6	3.6
銭甕	3						3	1.8
甕	1				1		2	1.2
内耳鍋						3	3	1.8
香炉	1						1	0.6
仏花瓶	1		1				2	1.2
茶入れ				1			1	0.6
水滴			1				1	0.6
灰落し	2						2	1.2
紅皿			2				2	1.2
餌猪口	1						1	0.6
置物?(魚)				1			1	0.6
計	81	7	30	5	1	40	164	
(%)	49.4	4.3	18.3	3.0	0.6	24.4		(100)%

は染付小杯である。伊万里製。8は唐津系と思われる陶器碗で、見込蛇ノ目釉ハギを行う。9は陶器蓋で瀬戸美濃製。10は鉄釉四耳壺で瀬戸美濃製。11は瀬戸美濃製の掛分花瓶で、上半部に灰釉を、下半部に鉄釉を掛け分ける。12は鉄釉手付水注である。瀬戸美濃製。13~18は土師皿である。SK03からは合計36枚の土師皿が出土したが大・中・小の3つに分かれるようである。またこのうちススが付着して灯明皿として使われたのが明らかなのは2枚のみで、他の遺構出土の土師皿と比べ割合が少ない。19は内耳鍋であるSK03出土の伊万里製品と瀬戸美濃製品の割合は磁器1に対して陶器2.7である。



◁魚形水滴



△ SK03 遺物出土状況（東から）



△ SK03 出土陶磁器(1)



△ SK03 出土陶磁器(2)

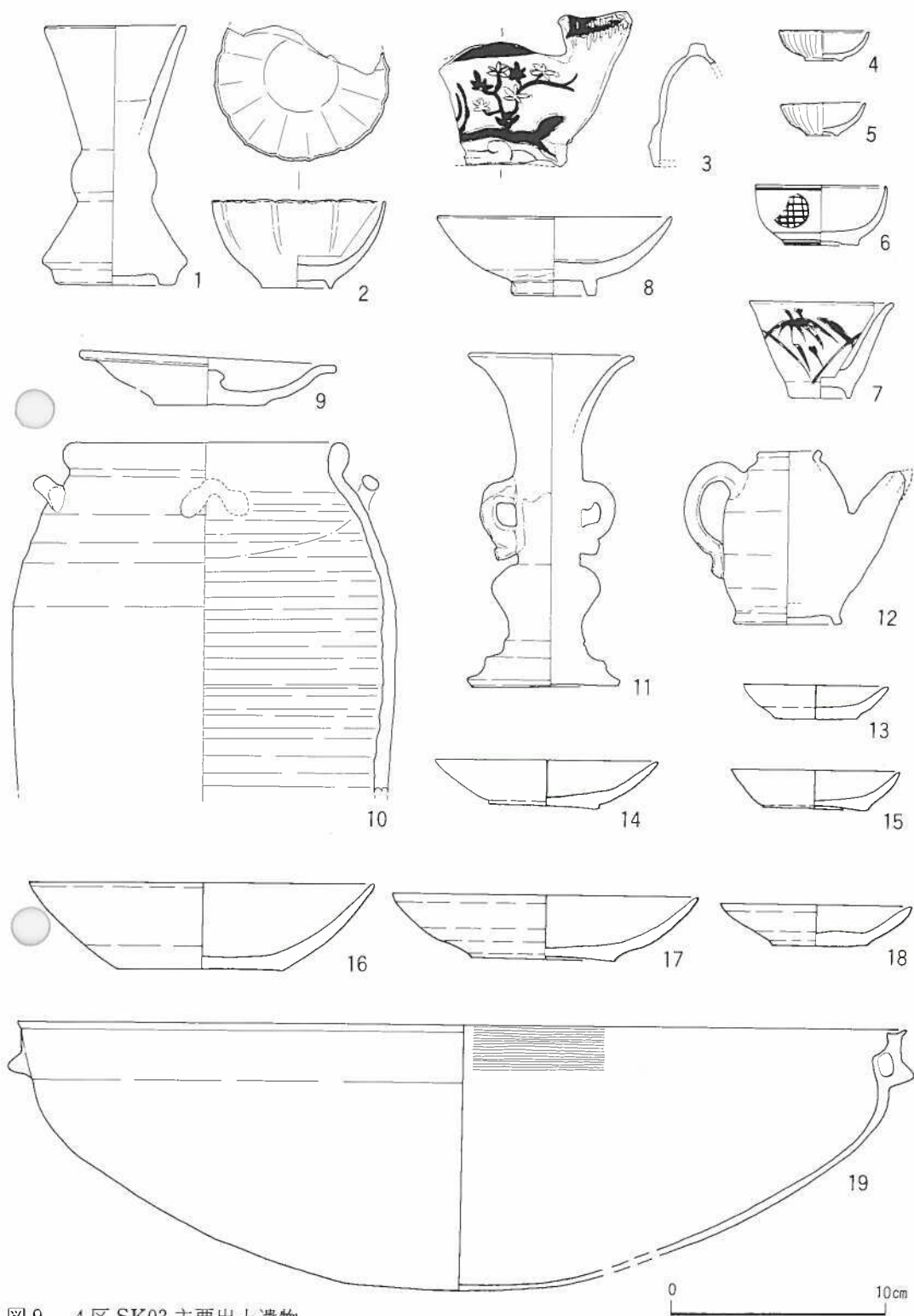


图9 4区SK03主要出土遗物

1次・11区 SK32

SK32は生駒氏屋敷内に掘られた廃棄土坑である。深さ約1.6m、東西幅約2m、南北幅約2.8mを測る。北側SK31を壊し、壁は垂直に近くていねいに掘られる。底面から80cmまでに推積する灰褐色粘質土は水分多く、木製品が状況よく遺存していた。

出土した木製品は漆碗・曲物・栓・へら・はし・柄杓・柄杓の柄固定具、くし、ゲタ、折敷、「御隠居様」墨書付札、生駒氏屋敷への出入用鑑札と思われる墨書札、不明製品である。またこれと合わせ魚鱗、獣骨など食用と推測される動物遺体、松種子などの植物遺体も検出された。

これらが廃棄された時期は共伴する陶磁器から19世紀後半の幕末頃と考えられる。屋敷内での生活を復元する上できわめて重要な遺物群である。

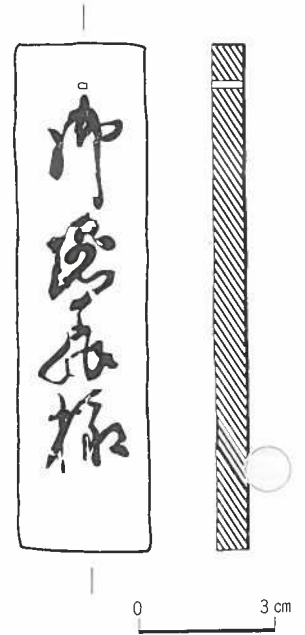


図10 「御隠居様墨書付札」

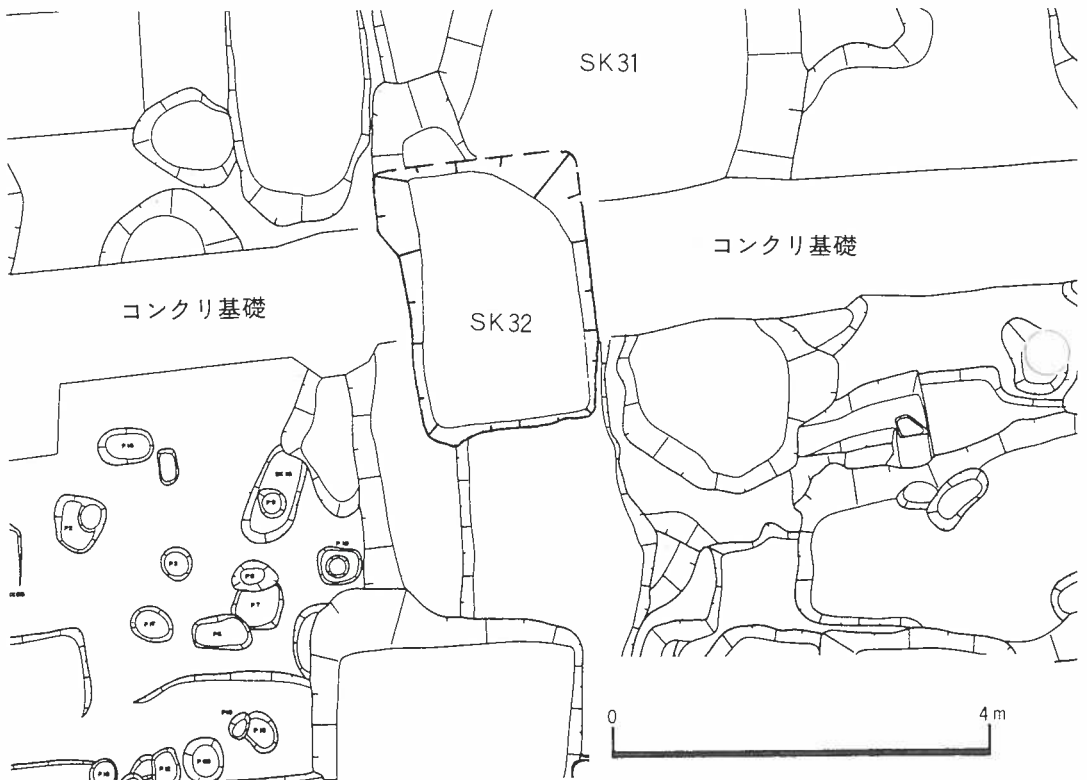
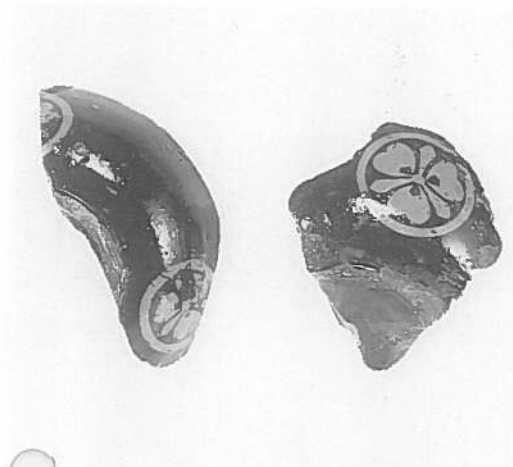
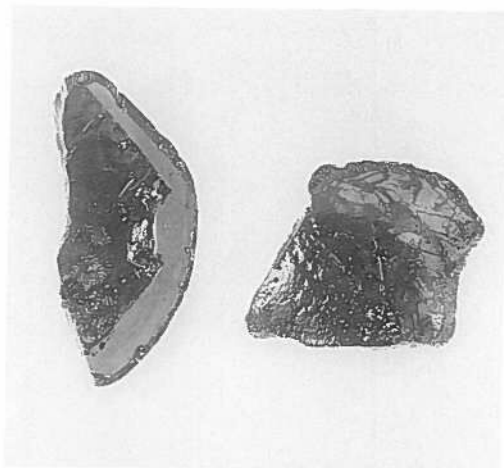


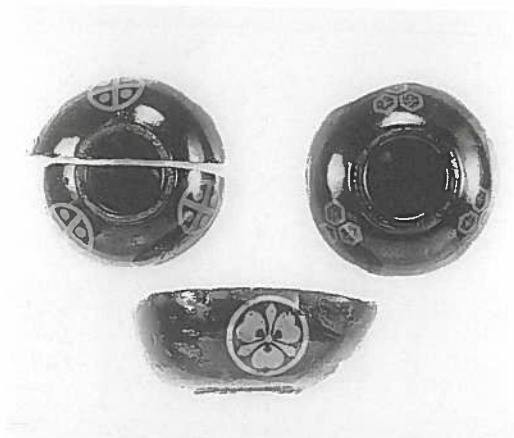
図11 SK32周辺図



△漆碗(1)



△同左内面



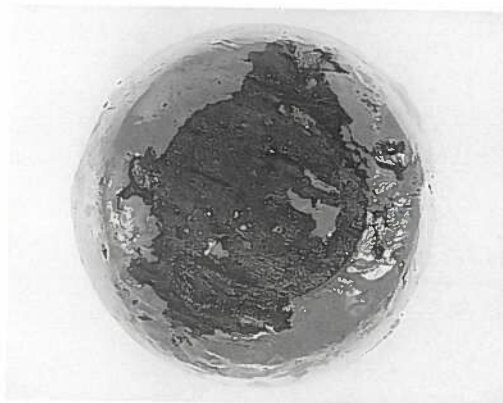
△漆碗(2)



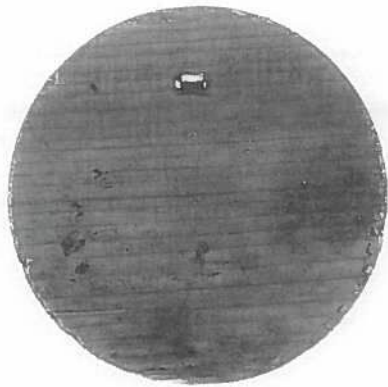
△同左内面



△漆碗(3)



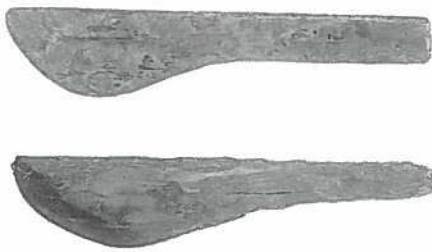
△漆碗(4)



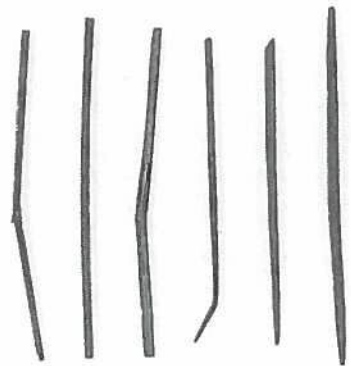
△曲物蓋



△栓



△へら



△はし

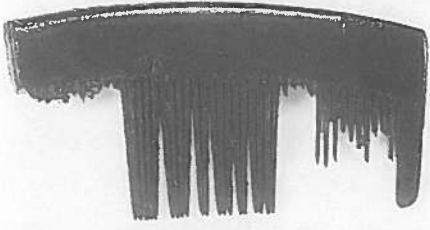


△柄杓の柄固定具



△金具付木製品

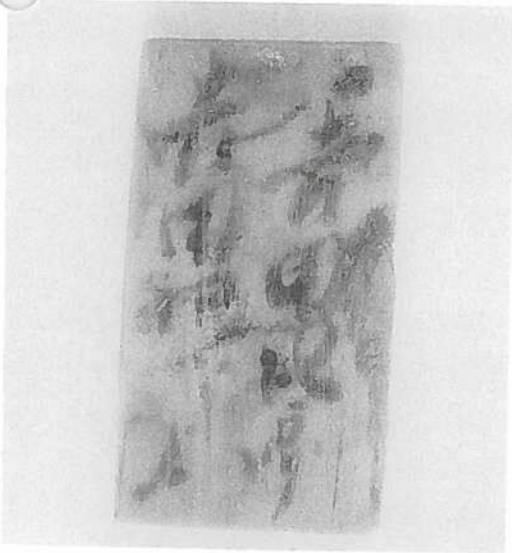




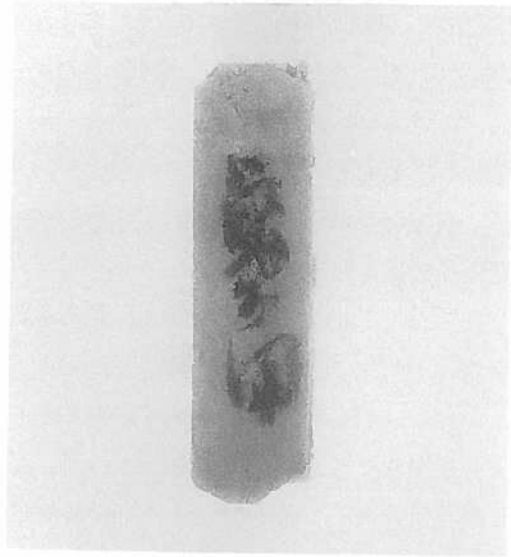
△くし



△げた



△鑑札(?)



△同左小口面



△陶磁器

第2次調査

調査地点は、江戸時代における名古屋城の南西隅、御園御門を入り西御土居筋の並びで、北より四軒目付近に該当する。

尾張藩の中間頭本役の奥村得義（1862年没）筆による『金城温古録』によれば、水野藤兵衛が居住し、「二軒拝領、但、南境少々中条多善へ入」と記述される。水野藤兵衛は、文化7年（1810）に勘定奉行の職にあった人物であろう。これ以前には、谷田喜伝治（次）あるいは渡辺佐一郎が居住し、拝領地として使用されている。明治時代以降に、旧陸軍の兵舎等が造営されたようである。

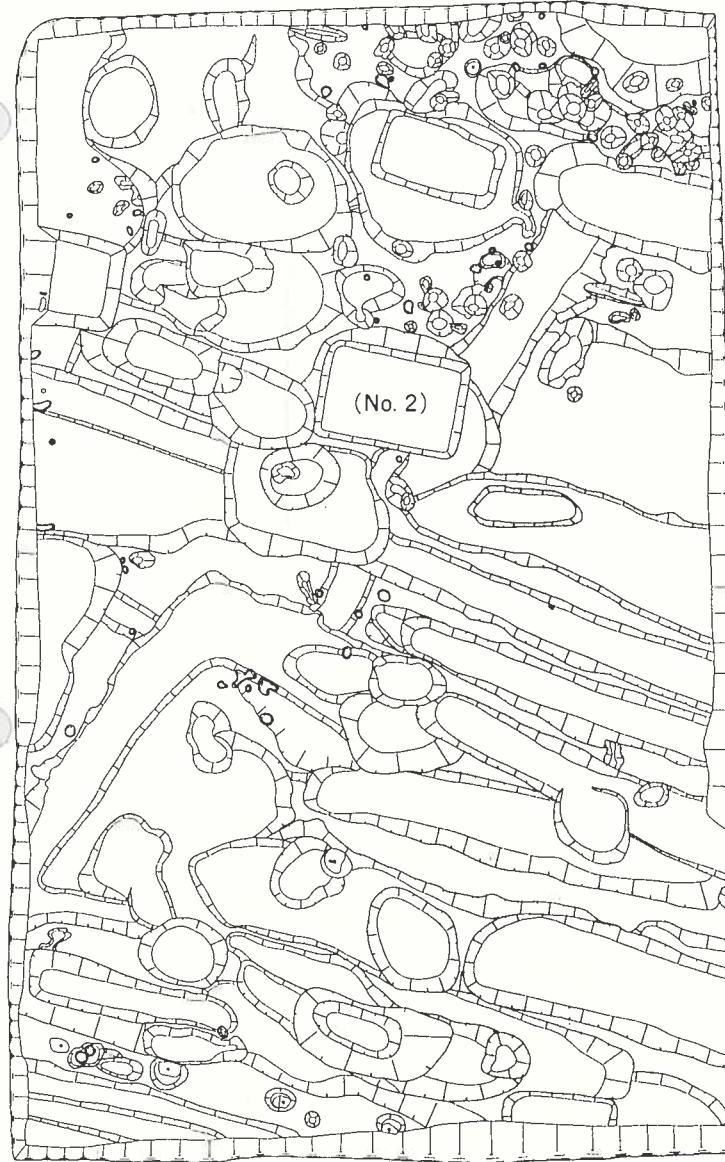
調査区は、試掘により破壊が判明した、旧プール跡を除く「L」字形で、旧プール跡の南側区で東西24m南北5mの長方形120m²、及びその西側区で東西10m南北17m 170m²で、調査面積290m²である。調査区の南東隅基準点を起点として、No.1～13の5m四方のグリッドを設定した。南側区が東からNo.1～5のグリッド名となる。試掘の結果、幕末以降と思われる厚み約20～30cmの整地面が、西側区を主として、地表下約50cmに堆積し、地山面（熱田層）までの深さが、平均で地表下約150cmと想定されていた。そこで、機械を使用して、整地面の上層までを削平した後に、整地面を慎重に掘り下げながら遺構の検出に努めた。

整地面の上層から、巾約50cm深さ約60cmの溝状遺構が、西側区で南北に、南側区で東西に走向する形状で複数検出された。この埋土は、レンガ片や礫を含む山土であったことから、これら溝は、兵舎等の建物基礎と考えられた。整地面を除去すると、灰褐色砂質土や黒褐色土の上面が露出し、この面で江戸時代の造築と考えられる遺構が検出された。外堀土塁に対してほぼ直交する方向に位置した、溝状遺構が西側区で数条発見された。そのうちの南西隅に在る2条は、巾約110cm深さ約60cmの形状で、約50cmの間隔を置いて平行に走る。この約50cmの堤状の場所に、ほぼ一間の間隔に4個の基礎石を発見した。この基礎石は、直径約25cm～30cm大の河原石で、その周囲約20cmが掘り込みとなる穴の底部に置かれ、石の底部は熱田層に接していた。河原石を発見するまでの埋土は、約10cm程であったが、近世陶器片を含むものがあつた。これら基礎石は、屋敷地境の建造物の基礎の一部であったとも考えられる（写真No.1）。この土層面とほぼ同一の高さで、調査区全域の精査をしたが、屋敷の建物配置を把握できるような基礎石や柱穴は検出できなかった。唯一、南側区の東端の地山面で、巾約30cmの浅い溝や、基礎石を除去したとも想定される凹地などの遺構があり、これらが西御土居筋に面する建物跡の一部ではないかと考えられた。

熱田層の上面は、高い場所で地表下約70cmの位置で発見され、この高さで多くの遺構



(写真 No. 3 ↓)



(写真 No. 1 ⇨)



△写真 No. 3 (西側区北より見る)



△写真 No. 2 (地下室遺構東より見る)



△写真 No. 4 (溝内の遺物; 上東より、下北より見る)



△写真 No. 1 (南側区西より見る)



△写真 No. 5 (土坑状遺構北より見る)

山茶碗出土位置

(No. 4)

(No. 5)

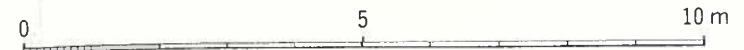


図12 第2次調査地区(市立丸の内中学校地内)の遺構図及び写真

を検出することができた。西側区のほぼ中央に、長方形の遺構が2基あり、一つは全形が判明し、長辺約200 cm 短辺約150 cm 深さ約160 cm の形状であった。この遺構の側面全体に、鋤状器具による掘削痕が残っている。熱田層の粗砂岩層であるために、灰褐色土などの埋土を除去すると、側面に掘削痕が明瞭に現われた。この遺構は、その用途が「火災時等に貴重品等をしま穴蔵」あるいは「貯蔵庫」説が有力視される、江戸時代の屋敷地内に設けられた地下室であろう。遺物は、近世陶器片がわずかに発見されるにとどまった(写真 No. 2)。

この地下室遺構の在る北側と南側とでは、露出する土層が著しく相違していた。北側は、黒色の強い土層で、特に調査区の北東隅一帯には黒色土層が堆積し、若干の弥生時代後期土器片や土師器片が出土した。さらに、地山面でピットが多数検出された。ピットの数は、その直径が約15~20 cm 深さが約50 cm のもので、柱穴と推測されるものの、その時期や様相を把握することはできなかった。また、この周辺では、整地面除去後に検出した、土坑が複数あった。この埋土より、明治以降の遺物と近世陶器が混在して発見され、旧陸軍に関連した工作が行われたようである(写真 No. 3)。

一方、南側は、灰色の強い粘質土層で、その中に0.5~1 cm 大の炭化物が多数混入しており、近世陶器が出土した。前述の屋敷地境とも考えられる遺構の北側では、この土層を掘り下げると、1.5~2 m 巾の溝状遺構が複数検出された。この溝の埋土より、近世陶器が多数出土し、その底面には鋤状器具による掘削痕が残っている。これら溝は、その埋土の状況から判断すると、排水路の役割を果たしたかのように思われた(写真 No. 4)。

南側区の中央寄りに、直径約200 cm 深さ約140 cm の円柱形の土坑があり、灰褐色土の埋土中より、近世陶器が廃棄された状態で多数発見された(写真 No. 5)。この遺構の北西には、灰褐色土層面で、多量の貝殻を含む落ち込み遺構があった。埋土の混貝土層に、近世陶器片が含まれている。円柱形の土坑の東側は、灰褐色土層の下に黒色の強い土層が堆積し、近世陶器片と共に土器片や須恵器片が若干出土している。

遺物は、近世陶器が主となり、室町時代の山茶碗、土器及び須恵器片が少量出土している。近世陶器は、19世紀代以降のものが多く、瀬戸及び美濃製品が中心となり、常滑製品も含まれている。その器種は、碗・皿類をはじめ、ひょうそく、徳利、搦鉢、おろし皿、土瓶、火鉢、手水鉢、水甕などの日常用品であった。山茶碗は、巾約150 cm の溝状遺構の埋土より数個まとまって出土した。この溝は、地山面での形状が、西側区の中央西寄りて屈曲して南側区の中央を東南へ走るものであった。しかし、溝の時期は、室町時代に属すると判断できる遺物を他に発見できず、確定できなかった。

第3次調査（A～D区）

3次調査区は、1次調査区の南側、東側に接したL字形の部分であり、名古屋城三の丸の南東隅付近に位置している。したがって、1次調査区南半部分と同様の屋敷地内にあたる。

A～D区は、合わせて約400m²であるが、名古屋市公館建築工事の関係から区分されたもので、西側からA～D区と称した。明治時代以降の建物基礎による攪乱部分は各区にみられ、特にC区に集中した。

A・B区

溝3条、土坑1基、井戸3基、柱穴多数が検出された。溝は、1次調査区を南北に縦断していた溝に関連すると思われる、A区北東隅で東へ90度曲がってB区検出の溝につながる状況である。今次の調査では、溝埋土からの出土遺物はなかったが、1次調査の状況から近世前期の屋敷割に関係する遺構かと思われる。

C区

井戸2基のほかは、柱穴が検出されている。

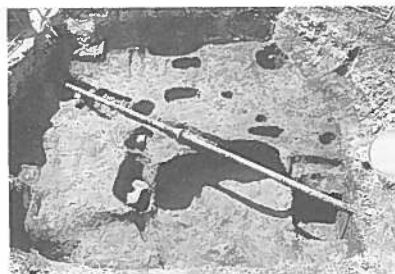
D区

1次調査区の東側に位置し、調査区は外堀土塁に沿っており、土塁までは、数mの距離にある。検出された遺構は、溝1条、土坑2基、柱穴多数がある。このうち溝は、東西方向に続いていて、西側の1次調査区で検出された溝に続くものであろう。柱穴の存在は、建物が土塁近くまで建てられていた時期があったことを示している。

以上のように、細長い調査区ではあったが、第1次調査で検出された遺構にも関連する成果があり、補足する資料となった。出土遺物は、主に土坑から検出され、溝や柱穴埋土からはまれであった。なお、三の丸遺跡では、江戸期の堆積土層が薄く重層的な資料が得にくい状況にある。



△調査風景（B区）



△A区



△B区



△C区



△D区

3次・A区 SK01

平面形は不整形円形を呈すると思われるが、東端は未検出である。深さは、検出面から55~70cmを測り、東側の方が深くなっている。壁は、底から上方にむかって内傾するオーバーハングの状態になっている。このような形状の土坑は、1次調査区の南半東部の土坑群にもみられ、17世紀の陶磁器を出土している。

SK01の出土遺物は、表に示したほかに瓦片が4点であった。実測図の1~4は、志野織部皿、5は、灰釉皿、6は、染付磁器皿、7は、総織部向付、8は、挿鉢、9は、黄瀬戸大鉢、10、11は、瓦である。陶磁器の時期は、17世紀の前半および中頃に相当する。1の志野織部皿は、口縁部にスス状の付着があり灯明皿として使用されたと思われる。土師皿は、1点出土したが、底部のみの破片である。

当遺構の出土陶磁器は、総点数が少ないものの、瀬戸・美濃製品が凌駕している。



△A区 SK01

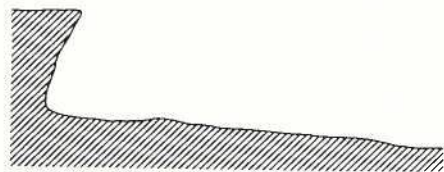
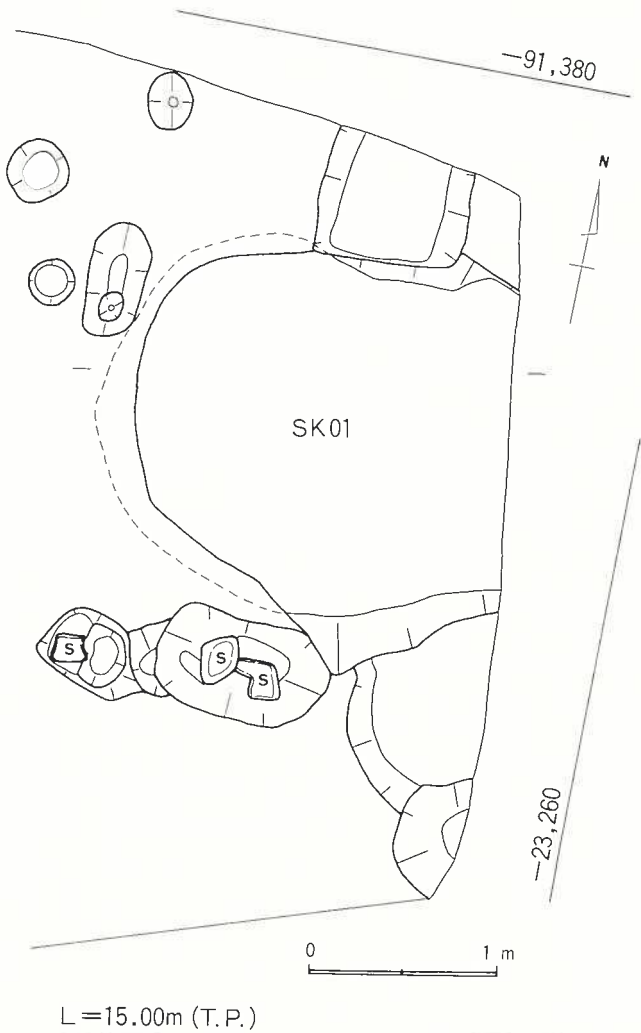
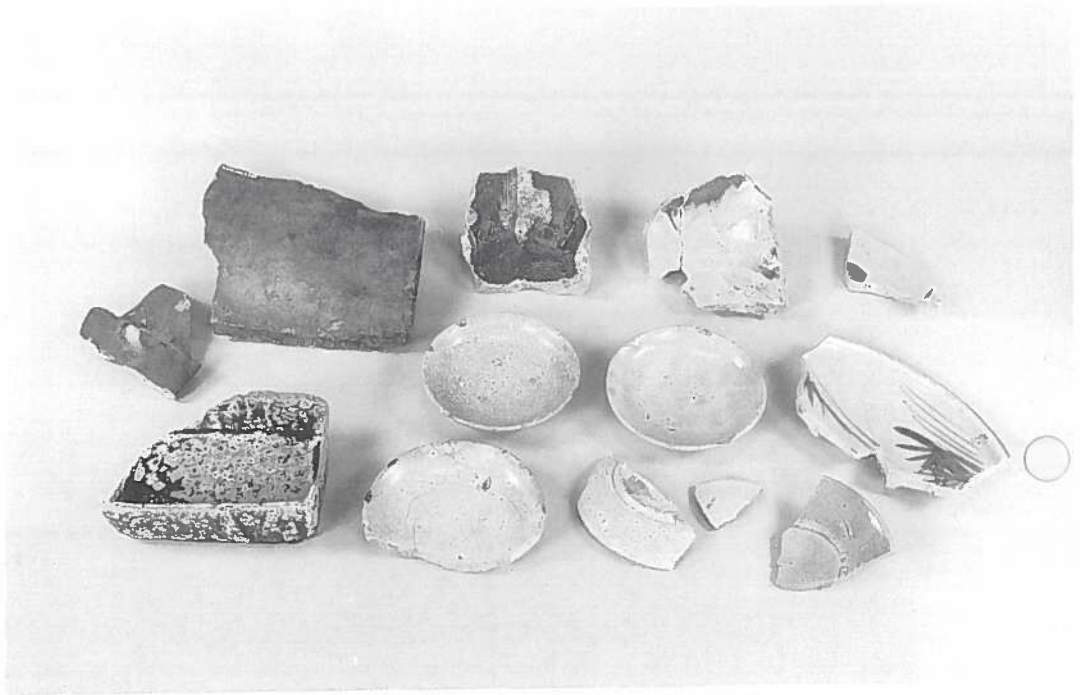


図13 A区・SK01平・断面図



△A区・SK01 出土遺物

表3 A区・SK01 出土陶磁器数

器種		製品	瀬戸・美濃陶器	肥前系磁器	土師質土器	計	(%)
碗類	灰釉碗		1			1	6.3
皿類	志野織部皿		8			8	50.0
	灰釉皿		1			1	6.3
向付鉢	染付皿			1		1	6.3
	土師皿				1	1	6.3
	総織部向付		1			1	6.3
	織部大鉢		1			1	6.3
播鉢	黄瀬戸大鉢		1			1	6.3
	播鉢		1			1	6.3
計			14	1	1	16	
(%)			87.5	6.3	6.3		(100)%

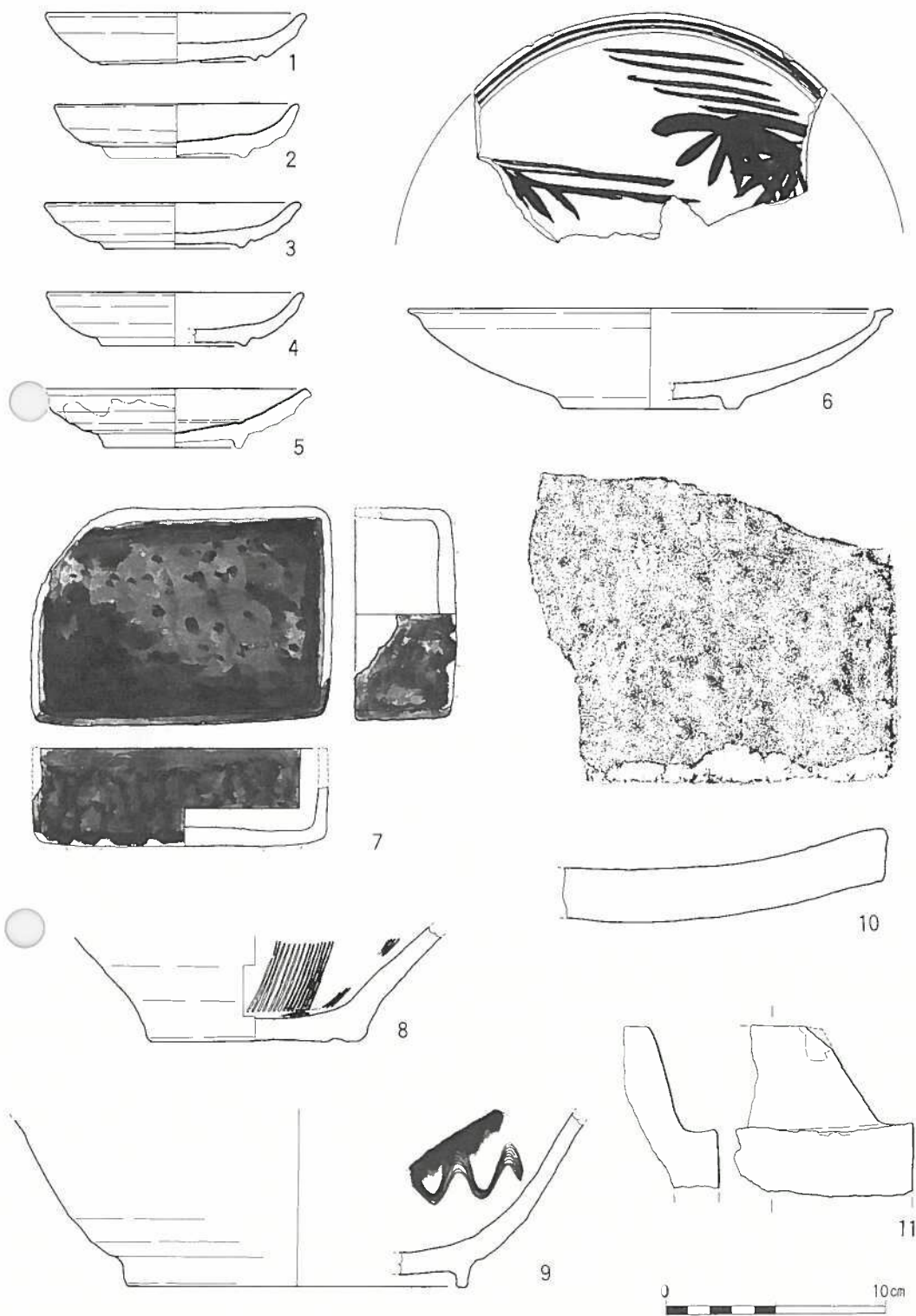


图 14 A区 SK01 出土遗物

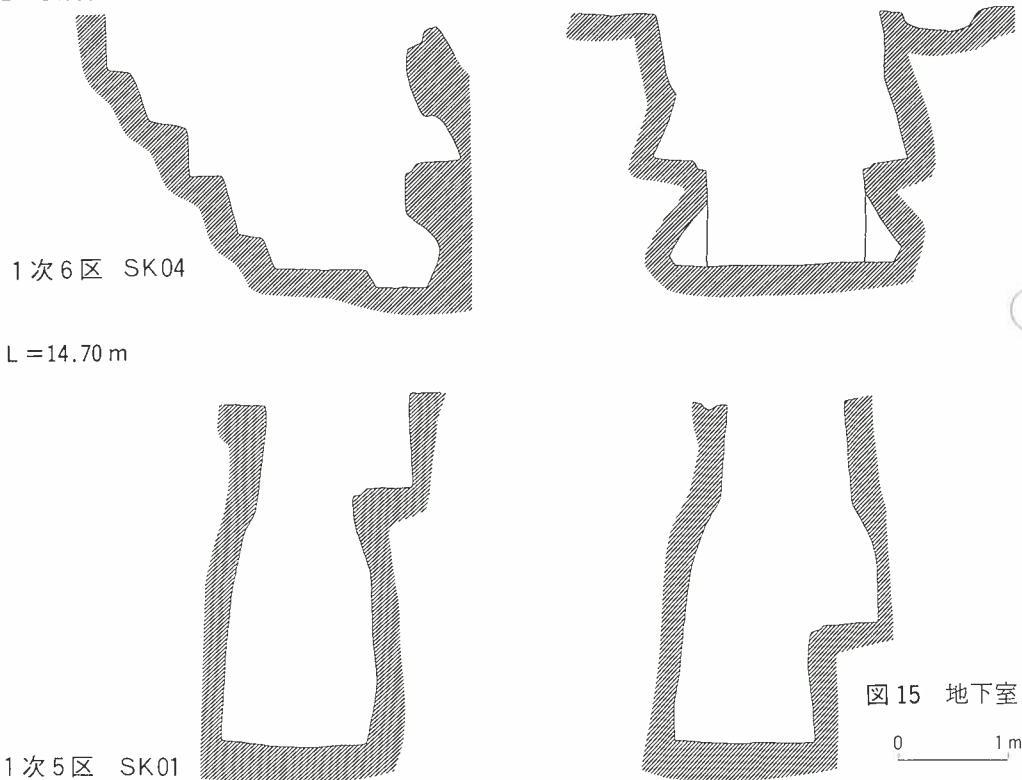
V 成果と課題

1 屋敷地における空間構成の把握

近世の都市遺跡を考古学的に究明するためには、遺構、遺物個々の観察、分類のみならず、街路、街区、屋敷地といった都市プラン的視点が不可欠なことはいうまでもない。こうした視点を得てはじめて学際的研究も可能になる。

今回の三の丸の調査では1次地点で街路と屋敷地縁辺部が調査されたことで、屋敷地そのものの形成、改修に関する知見が得られた。殊に街路が定まるのが17世紀中頃になることが判明したことは、文献では不明であったことで三の丸の屋敷地成立を考える上で重要である。また屋敷地成立直前につくられた真北方向の溝は三の丸自身の成立に伴う溝の可能性が高く、具体的に城郭がどう普請されたか、今後他地点の成果を合わせて検討したい。

しかし屋敷地内の復元は、建物の復元が困難であることから明快ではない。建物に関する知見では礎石の沈下を防ぐため、礎石位置下の地面を掘り、平板な石を配しつつ、突き固める基礎工事「ろうそく地業」が検出された。遺構のベース面となる熱田層は比較的固く、安定しているにもかかわらず十二分にていねいな工事が行われていたのである。今後



どの時期のいかなる建物にそうした地業が行われたかを特定することが必要であろう。

また城下町の中、下級武家屋敷の調査では未発見の地下室が検出された。一部を示す(図15)。形態はこの他多くの種類が認められた。いずれも18世紀以降の遺物が一括廃棄されており、最後は廃棄用土坑に転用されていた。地下室は建物内に配置されたと推測されるが、具体的な関係を示すに至らなかった。

今後各時期ごとの遺構のセット関係をつかみ、屋敷内の空間構成の復元に努めたい。

2 遺物の把握

今回の三の丸の発掘で17世紀の井戸、18世紀の廃棄土坑の一括遺物を選んで瀬戸美濃製品と伊万里製品の比率を確認した。この結果17世紀段階から18世紀段階になるに従い伊万里製品の比率が高まる傾向は江戸と同じだが(仲野泰裕「美濃窯製品の生産と流通をめぐる諸問題」『美濃の古陶』2、美濃古窯研究会 1988年)、その傾向は名古屋ではゆるやかであったことが推測された。この調査でもこうした比率検討をしていない遺構がほとんどであり、今後同様の作業を城下町域まで広げて進めたい。

また1次11区SK32から出土した漆碗については元興寺文化財研究所の北野信彦氏の分析によれば、漆碗の用材選定は広葉樹のブナ、ケヤキ、トチノキ、不明広葉樹散孔材で行われ、このうち木取りはブナは板目取り、柾目取り1点ずつであったのに対し、トチノキは試料25点すべてが横木地板目取りによることがわかった。そしてブナ、トチノキのような大量製産に向く一般性の高い適材を用いたものには炭粉下地を施し、漆塗り構造や使用顔料も簡易なものが多かった。一方ケヤキのような最良材を用いたものも認められた。これらよりSK32から出土した漆碗は大半が一般日用漆器に属するものであることが判明した。

3 屋敷地の環境把握

遺構内より出土した遺物から江戸前期に遡る可能性がある1次11区SK31(図11参照)埋土には多量の昆虫遺体が含まれていた。愛知県埋蔵文化財センターの森勇一氏の分析によれば、オオミズスマシのような水棲昆虫、センチコガネのように食糞昆虫、ニジゴミムシダマシのような森林に住む昆虫、ヒメアカホシテントウのような草木に住む昆虫がいたことが判明した。魚骨などが共伴することから澱んだ水があり、ゴミ捨てにも近い、広葉樹がある、やや荒れた庭が想定されるという。

このSK31がある部分は屋敷地(A)の全体からいえば裏に当たる所であり、裏庭部分に相当する。昆虫からの環境復元はこうした状況ときわめてよく一致するといえよう。今後一層自然科学的な分析による環境復元が重要であるといえよう。

名古屋城三の丸遺跡

— 1・2・3次調査の概要 —

1989年3月31日発行

編集 名古屋市見晴台考古資料館

発行 名古屋市教育委員会

印刷 株式会社 刈谷高速印刷



